

# いえらく

Centro de Estudios Latinoamericanos de la Universidad de Estudios Extranjeros de Kyoto  
Centro de Estudos Latino-Americanos da Universidade de Estudos Estrangeiros de Kyoto

vol. 46 2024年3月1日

京都外国語大学



## 京都外国語大学森田嘉一最高顧問を偲んで

京都外国語大学森田嘉一最高顧問は、2023年9月10日93歳で逝去された。ラテンアメリカ研究センターは、森田先生のラテンアメリカ、そして地域研究の重要性への熱い想いを具現化するものとして1980年に設立されたメキシコ研究センターをその淵源とし、今日まで43年の歴史を刻んできた。森田先生のご逝去を悼み、ここに歴代所長のそれぞれの思いを追悼文という形で掲載することにした。



## 森田嘉一先生との思い出

大垣 貴志郎

1963年2月に京都外国語大学旧四号館二階の一室で、森田嘉一先生に初めてお会いした。まだ、国立大学一期校と二期校の選抜試験制度が残っていた時期で一期校の入試に不合格となった私は、将来を読めない不安な部分もあるがこれからは進路転換を図って挑戦の青春時代を送ろうと決意していたころ、京都外大ではイスパニア語学科を新設することを知り翌年に受験する。当時は一般入試でも受験学科目の他に面接試験があった。「浪人」が会場に入室してみると教室の隅にガストープがあり天板には水蒸気を出すための金盥が置いてあった。面接委員の全員はマスクをしていたので、これは乾燥した室内の空気と都市ガス燃料が排出する二酸化炭素から呼吸器官を保護しているのだと直感した。緊張しているはずの受験生の割に観察眼は冴えていたらしい。順番がきて二

人一組の面接委員の前に神妙に座ると、その一人は細身で色白、身なりはとても整っていた。風貌から判断して冷徹な頭脳の持ち主ではないかと映ったので、もしかすると、教授会仲間でカミノリという綽名で呼ばれているのだろう、と面接後の緊張感から解き放たれた途端に気になる人物評の想像を膨らませていた。その日は何を質問されたのか、どんな返答をしたのかは皆目覚えていない。

入学してから、旧一号館125番教室の三人掛け用の硬い木製の椅子に座って長机の表面にふと目を落とすと、そこには新入生にとって先輩から格好のメッセージが鋭利な文具の先端で刻み込んである。始業予鈴がなり選択必修科目の「中南米事情概説」の講義担当者が入室すると、黒板を背に立つ森田嘉一助教授の姿が目に入った。あの日

の面接委員である。先生は毎週の講義に仕立てのいい背広に合うネクタイを締めて来られた。大半の学生はまだ、詰襟の学生服で角帽までかぶっている者もいた時代で、その一人は自分であった。果たして講義ノートはどうして録ったのかは記憶していない。学期末試験で合格点をもらったことだけは確かだ。教室で勇ましく先生に質問したこともなく、先生の研究室の所在も知らなかった。後年、その学科目を自分が担当するなんて当時は夢想だにできなかったのである。さらに、森田姓は京都外国語大学でどんな重みがあるのか、在学中から卒業するまで顧みることはなかった。

「挑戦の青春時代」の日記第一頁の書き込みは、旅好きの私が三回生のころに単身で世界一周したことで、神戸港を西に向かって出帆しマルセイユ港から欧州を周遊してアメリカ大陸に渡り、太平洋を空路で三か月ぶりに羽田空港へ帰国したことである。また、卒業してからはシベリア鉄道を經由してスペイン北東部にある大学大学院に入学したことは追記であった。スペイン滞在中の数年間先生とお会いすることもなく過ぎて、帰国してから母校の教員に採用されて森田教授の知遇を得る。ある日、先生から1958年に米国に留学したと伺った時、小さな冒険野郎の私は大きな挑戦者に脱帽したことを覚えている。スペインに行く前に読んだ『留学』の著者は遠藤周作であるが、初版は1965年だったと記憶している。また、イスパニア語学科の教員になってしばらくした頃、古参の同僚が森田嘉一先生は大学創立者の直系だと私に耳打ちした時、この忠告は学内で先生に出会う時は襟を正せということかと思うと、つい考え込んでしまった。それは1971年4月のことである。

「挑戦」の第二弾は大きかった。在京都メキシコ名誉領事館が同年開設される経緯に関与したことである。設置応諾の打診は在京大使館公使J.S.氏から大学に届き、その案件を学科でも検討するように指示されていた。そのとき、主任教授が主張したように要請を固辞する進言をしていたら名誉領事館開設は見送られていたかもしれない。ところが、事務処理等で学科の協力が必要になる場合が生じれば、少数の同僚と共に私もお手

伝いすると申し出た付帯意見も添えて学科の総意を回答したところ、大学側は学科からサポート体制は提供される見通しだと判断して開設に至った。これは1971年10月から2023年12月7日まで50年間も存続した名誉領事館の一つの挿話である。「森田一郎初代名誉領事は在京都メキシコ名誉領事館開設の要請を承引するには沈黙考したのではないかと追想しています。(中略)さらに開館の決断を下すまでに、設置場所が大学構内になることへの配慮と、教室に併設する異文化圏理解を助長する交流の場が誕生することへの抱負、また、本学のスペイン語学科から開館後に直面する事務に対応する支援を事前に取り付けることなどは看過しなかったと思います。」(典拠②)。かくして、森田一郎初代在京都メキシコ名誉領事はメキシコ外務省と日本外務省から認証を受けて就任した。開館後しばらくして、森田一郎名誉領事は用意した大使宛の書状を「品格のあるスペイン語に翻訳して下さい」との伝言をそえて秘書室から私に依頼されたことがあった。その準備をはじめたときほど自らの外国語習得への不勉強さに恐怖を覚えたことはないが、それからは何事にも絶望しないようにしている。森田一郎先生から受けた薫陶であった。

1976年に森田嘉一先生が二代目の名誉領事に就任された頃から、領事館業務は煩雑になり先生との出会いは新しい局面をむかえた。76年にブラポー・アウファ文部大臣来学、78年にロペス・ポルティージョ大統領来学、80年の京都市・グアダハラ市姉妹都市盟約締結などは、大使館の援助もあってメキシコ政府やハリスコ州・グアダハラ市と折衝が円滑にできた結実だと考えている。メキシコから研究者、芸術家や作家などの来訪者を迎えた機会は、京都市民と本学や他大学の学生を招いて講演会などを開催したことは言を俟たない。また、メキシコで刊行された学術図書や考古学資料の寄贈、とくにメキシコ政府の官報は開館以来、定期的に送付されてきた情報で電子媒体になる時期までの紙媒体の官報は年度ごとに製本してきたので、いまでも研究者の渉猟に供用している。

しかし、学内での名誉領事館設置を機能的に生かす方策を森田先生と模索していた時期に、メキ

シコを中心としたラテンアメリカの地域研究所の新設が浮上した。当時、学内の各学科では言語の習得を補完する地域研究の基盤づくりを計画していたが、イスパニア語学科はいち早く、1980年には「メキシコ研究センター」を設置してその先鋒となった。地域研究の組織を誕生させたことは、1947年創立の新制単科大学、京都外国語大学がラテンアメリカ地域研究を軸にした異文化圏理解を系統的に進展させる教育機関に発展して、京都市民や学会関係者を通じて大学は情報発信と国際交流の拠点に認知されたようだ。森田嘉一先生が京都外国語大学のモットー Pax mundi per linguas を飛躍的に拡大させたのもこの時期である。1980年設置の「メキシコ研究センター」から2001年に「ラテンアメリカ研究所」へ改組転換される過程は、典拠①に詳細が述べられている

ためその記述に譲りたい。大学の変革期に森田嘉一先生とお会いしたのは忘れ難い思い出になった。

典拠① 『京都外国語大学ラテンアメリカ研究所の現在』所収 辻豊治「京都外国語大学ラテンアメリカ研究所創立四十周年に寄せて」京都外国語大学大越翼編 2021年3月31日

典拠② 『在京都メキシコ名誉領事館 50年の歩み』所収「森田嘉一メキシコ名誉領事のあいさつ」在京都メキシコ名誉領事館 2020年3月

(初代京都外国語大学ラテンアメリカ研究所所長)

## 森田先生への哀悼と感謝

辻 豊治

森田嘉一先生の突然の訃報に接し、心からの哀悼の意を表します。私自身、京都外国語大学ラテンアメリカ研究所（現京都外国語大学ラテンアメリカ研究センター）の副所長、所長を合わせて5年間勤めさせていただきましたので、森田先生との付き合いは主にラテンアメリカを通してということになります。私が2020年に退職して以降のコロナ禍やまたこの1年、体調を崩していたこともあり、大学にはご無沙汰しており、森田先生も理事長を辞され、お会いする機会を逸してしまいました。もう一度、ラテンアメリカの歴史、政治、文化、旅行、人との出会いなど、いろいろお話できればと、返す返すも残念でなりません。

「京都外国語大学ラテンアメリカ研究所創立40周年に寄せて」（大越翼編『京都外国語大学ラテンアメリカ研究所の現在』）において、次のように書かせてもらいました。

「森田嘉一現理事長は研究者としての出発点はラテンアメリカ政治研究であり、大学運営に関わってからもラテンアメリカに対しひとかたならぬ関心と愛着を持ち続けておられます。この

森田先生のラテンアメリカへの情熱が1980年のメキシコ研究センターの創設に繋がり、2001年の京都ラテンアメリカ研究所、さらに2016年の京都外国語大学ラテンアメリカ研究所へと今日まで一貫してラテンアメリカ研究と教育に邁進してきた原動力になっていると思います」

外国語大学の理事長として世界中の国々との付き合いがあり、当然、民間外交の重要な一翼を担われましたが、とくにラテンアメリカへの愛着は特別だったと思います。立場上、世界との付き合いは協定校を中心とした大学関係者、各国政府関係者、各国駐日大使という公的レベルにならざるを得なかったようですが、キューバやニカラグアを何度も訪問され、また両国からの訪問客を温かく受け入れられたことなどは、政治や体制を越えて、人と人の付き合いを大事されていたことの表れだと思います。私の目には経営者としてより、音楽や絵画など幅広く芸術に造詣の深い文化人、教養人、そして何よりもラテンアメリカのあらゆる分野にわたって関心を持たれる愛好者としての

印象をもっています。

理事長室では緊張しながらの研究所業務とは別に、ラテンアメリカのことは固より切手のことや西洋絵画の話にも及びその博覧強記に驚かされることが多々ありました。大垣貴志郎先生の原稿「森田嘉一先生の思い出」（事前に読ませていただきました）によると森田先生が中南米事情を担当され、それを大垣先生が受け継がれていたとのことですが、私も中南米事情の科目を担当しましたので、奇しくもこの分野で森田先生の意味を受け継ぐことができたことを光栄に感じています。

私自身、研究所での仕事とは別に趣味を兼ねて歴代大統領を中心としたラテンアメリカ切手と西洋絵画切手を収集してきましたが、2017年の創立70周年の記念行事の一環として『切手が語る歴史と文化—ラテンアメリカ・欧米・西洋絵画の切手—展（2018年2月17日～4月14日）を学内の国際文化資料館で開催しました。3月3日にはお忙しいなか、展示会場に足を運んでいただきラテンアメリカ20ヵ国と京都外国語大学の語学科に対応する欧米と西洋絵画の切手合わせて1245点を見ていただきました。また展示会に合わせて発行した図録には先生から巻頭の文章をいただきました。学園創立70周年の記念行事に貢献できたことで先生への多少の恩返しができるのではないかと思います。

前立腺癌の手術を前に不安を募らせていた私に対し、森田先生から「(早期発見で)よかったね」とむしろ祝福の言葉をいただき、そのような見方もあるのかと気持ちが落ち着いたことを覚えています。先生はお歳を重ねても多忙を極めておられたので、お会いしたあとは必ず「どうぞ、ご無理なさらないように」と申し上げてきました。体調

不良もありになったようですが、教員の前ではおくびにも出されず、快活に振舞っておられました。本来が楽天的でその面でもラテン気質が性に合っておられたかもしれません。

ラテンアメリカ研究所の一員として研究、教育に携わってきた身としては恵まれた環境を与えていただきました。また短いながらラテンアメリカ研究所所長として仕事をさせていただきました。至らぬことばかりでしたが、ラテンアメリカ研究の同志として認めていただいたのが、すべて寛大に受け入れていただいた森田先生には感謝の他ありません。

このような追悼文は今まで、ラテンアメリカ研究の先学であり、同僚でもあった大井邦明先生と上智大学の恩師グスタボ・アンドラーデ先生の追悼文集で書かせてもらいました。私にとっては雲の上の存在の森田嘉一先生への追悼の文章を書かせていただくこと自体、大変おこがましいことですが、先生への心からの哀悼と感謝の意を込めて書かせていただきました。

## 参考

平山一城

2019 『京都外国語大学森田嘉一（リーダーが紡ぐ私立大学史③）』、悠光堂。

辻豊治

2021 「京都外国語大学ラテンアメリカ研究所創立四十周年に寄せて」『京都外国語大学ラテンアメリカ研究所の現在』、大越翼編、京都外国語大学ラテンアメリカ研究所。

2023年12月14日（「お別れの会」の日）  
（第二代京都外国語大学ラテンアメリカ研究所所長）



## 失われた会話を求めて

ー森田先生とラテンアメリカ研究とー

大越 翼

私は、辻先生の後を継いで、2018年に所長に任命された。それから現在に至るまで計6年間ラテンアメリカ研究所（2023年から研究センターに改称）の長として、さまざまな活動を企画実行してきた。ただ、森田先生とのつながりに関する限り、着任後3年目後半からコロナ禍に巻き込まれ、授業や会議が全てオンラインで行われるようになって、先生とお会いすることが全くできなくなった。3年の年月を経て、何とか元のように対面で授業が始まるようになって、先生は最高顧問として限られた日にしか大学にいらっしゃらなかったから、大垣先生や辻先生のような濃厚な関係はついに持つことができなかった。これに関して、今なお忸怩たる思いがある。

本学におけるラテンアメリカ研究は、メキシコ研究センターの設置に端を発し、京都ラテンアメリカ研究所、京都外国語大学ラテンアメリカ研究所、そして2023年度より京都外国語大学ラテンアメリカ研究センター、とその呼称を変えながらも43年の歴史を閲するものとなった。むろん、学会においても広く認められた存在であることは言を俟たない、私が所長をお引き受けした最大の理由は、まさに研究所が関西におけるラテンアメリカ研究の拠点となっていることに魅力を感じたからである。メキシコで27年間マヤ社会の歴史学的、人類学的研究を行い、同国のみならず欧米に研究仲間を多く持つ私ができることがあるのではないかと、そう思ったのである。森田先生に初めてお会いした2015年に、メキシコにおける豊かな経験をぜひ本学の学生に還元してくださいというお言葉をいただいたが、その延長線上に私はこの栄誉をとらえたのであった。

いざ所長になってみると、人間関係の難しさに頭を悩ますことになった。それでも、教養講座や研究講座の充実、来日した友人の研究者たちに講演をしてもらうという企画、研究所内研究会やランチタイムトークの企画、紀要を「学術雑誌」と

位置付けるために明確な執筆要項を作成し直し、内部と外部のピアレビュー（査読）制を確立、さらには新たな電子出版媒体としてIELAK Publication Seriesを創設して、所員が研究成果を世に問う場を提供するとともに、研究講座の発表内容を本として出版するなど、いくつかの新基軸を打ち出した。それはとても充実していて楽しいものであったし、森田先生もこれを喜ばれた。

しかしそれも束の間。まもなくコロナが日本を席卷し始め、大学はあらゆる活動をオンラインで行う方向へと舵を切った。2020年の後半から、研究所は一切の活動ができなくなってしまった。今では当たり前のように使いこなしているZoomやTeamsといった、それまで聞いたこともなかったメディアの使い方を私たち教職員が必死に学び、とりわけZoomを使ってオンラインで再度研究広報活動を始められたのは、コロナ禍が始まって1年も経とうとした時であった。

オンラインによる教養講座や研究講座の開催の利点は、日本はもちろん世界のどこに居ようとリアルタイムで講演が聴ける点にあり、実際、それまで地元の常連の方々を中心に20人前後で推移していた聴衆は、少なくともその倍、しかもさまざまな地域と階層の方々に参加していただけるようになった。しかし、である。コロナ禍前の教養講座では、その終了後にレセプションを行い、講師の先生と参加者の方々が語らう機会を設けていた。これはとても楽しかった。だがオンライン開催では、それができない。講演のあと少し残って先生に質問することもできない。人と人との関係性が希薄になってしまうのである。森田先生は、人とのつながりをとても大切にされていたから、このことを知ったらきっと残念に思われたことだろう。それがオンラインという「便利な」メディアの落とし穴なのだ。

森田先生と会津藩のつながりは周知のことである。私の父方の曾祖父は、その会津藩と境を接し

ていた二本松藩の藩士であった。戊辰戦争の折、薩長の会津藩に対する態度の傲慢さ、酷烈さが目にあまり、また長年藩境を接していた経緯もあり、結局藩は会津藩に味方して奥羽列藩同盟の一員となった。結果は惨敗に終わり、二本松少年隊として有名な、会津の白虎隊よりさらに若い少年たちも命を失った。そのことを森田先生はよくご存知でいらしたのには驚いた。今度一度ゆっくりお話ししましょうとおっしゃってくださったが、その機会はずいぶん訪れなかった。会津墓地のある黒谷の金戒光明寺へ行行ったと申し上げた時とてもお喜びになり、事前に言ってくれたら、お寺に話して一般公開はしていないところも見られたのにと残念そうにおっしゃったのも懐かしい。先生とは、会津・二本松という旧幕時代の繋がりがあって、仕事以外のお話をもっと伺ってあげばよかったと思う。

仕事の上では、すでに述べたように緊密な関係を森田先生と構築することはなかった。しかし、この間の「お別れ会」の後でいただいた先生の著書『Destiny この道を貫いて』を拝読していて、先生のラテンアメリカにける想いを知ることができた。そして何より、メキシコ研究センター、その後のラテンアメリカ研究所設立の目的が、「語学を通じた『国際地域研究』を発展させること」を根本的な戦略とされていた先生のお考えをもとにしてきたこと、そして貴重な蔵書を持つ図書館、豊かな資料を持つ国際文化資料館などを有機的に活用して、他の国々の研究機関などと連携した活動を目指されていたことを、先生の御本で知った。実に慧眼であられたと言わざるを得ない。語学だけ出来る、ではダメで、それを話している人々の持つ文化や歴史、政治や経済などについて深い理解と広い知識を有して初めて異文化理解・多文化

共生が可能になるのだとも明確に語っておられる。これを読んだ時に、おこがましくはあるが、私の目指していたものは先生のお考えに沿ったものであることを知った。これから少子化がさらに進むから、定員の確保はますます難しくなってくるだろう。その中であって、森田先生が目指された「語学と地域研究」という二つの柱、その中でもラテンアメリカ研究という本学が43年にわたって掲げ続けてきた「老舗の暖簾」を、そして先生も持っておられたラテンアメリカへの熱い想いを大切にしたいし、またそれがラテンアメリカ研究センターの責務であろうと考えている。

「うちに来ていただけますか」、私の肩を抱くようにして森田先生はおっしゃった。2015年のことで、東京のホテルで開催された校友会の集まりを終えて、松田学長とともに私に会ってくださったときのことだった。あれから8年の歳月が流れた。その森田先生の、少しはにかむような眼差しで、暖かく微笑んでくださったお顔を私は忘れることができない。もっといろいろなことを先生から学びたかった。もっと会津や二本松のこと、今上陛下のこと、ラテンアメリカのことなどをお話ししたかった。その寂しさを胸に、長を離れてからも本学におけるラテンアメリカ研究の更なる発展のために、微力を尽くしたいと思う。いつか彼の地で先生にお会いした時、先生は私をどう迎えてくださるだろうか。

## 参考文献

森田嘉一  
2023 『Destiny この道を貫いて』、悠光堂。

(第三代京都外国語大学ラテンアメリカ研究センター長)

## 連載：マヤ社会を考えるために

## 第16回 野外調査で思ったこと：「あだ名」についてのさらなる考察

大越 翼

「ああ、それならドン・ニシヨだ。この道をまっすぐ2ブロック半行けば、左側に彼の家があるよ。」そう親切に教えてくれたのは、教会近くにある仕立屋の若い主人だ。コロナの影響でもう4年近くヌンキニ村には来ていなかったの、いつもお世話になる方へどうやって行くのか、記憶が定かではなかったのだ。「ニシヨ」、そう、思い出した。これが彼の「あだ名」だった。この村の人々が、「あだ名」で呼び合っていることは、すでに以前の連載（第10回）の中で書いた。彼らはお互いに誰も本名で呼ばないし、またそれを知らないのが普通なのだ。この「あだ名」の種類についてもっと調べてみたい、それが今回（2023年夏）の調査の目的のひとつだった。（写真1、2）

ドン・ニシヨは、相変わらず元気そうだった。数年見ない間に多少歳をとったようだが、それはこちらも同じだ。久闊を辞し、しばらくはお互いの近況や噂話に花が咲いた。やはりコロナで亡くなった人もいた。カルキニ町にある水汲み場の目の前に住んでいた、ミルパ（トウモロコシ畑）で仕事をするのが大好きで、私が慈父のように慕っていたあの人も鬼籍に入ったと知って悲しかった。時は無慈悲だ。大切な友人を思い出の中に追いやってしまう。

ややあって、ドン・ニシヨに今回の調査の目的を告げ、知っている限りの「あだ名」を教えてくださいませんかと頼んだ。3つほど出てきて、その人たちの本名をノートに書き込んでいった。その中には、マルチャ（Marucha）という彼の奥さんの「あだ名」も含まれていた。メキシコで売られているカップヌードルの代名詞のようになっている東洋水産の「マルチャン」を想起させる名前ではないか。聞いてみると、そうではないとのこと、何の意味かはわからないようだ。ところが、だ。それから急に何も言わなくなった。私の顔をじっと見て思い出そうとされているのだが出てこない。「実際に会えばすぐに言えるんですが」と気の毒そうにおっしゃる。どうやら、ドン・ニ



写真1 ヌンキニ村の教会  
© 筆者撮影（2008年8月31日）



写真2 ヌンキニ村の風景  
© 筆者撮影（2023年8月21日）

シヨは抽象的に整理された体系的な形で村人の「あだ名」を記憶しているのではないようだ。実際、そのあと外に出て村の中を歩いていると、会う人ごとに大きな声で、それこそ叫ばんばかりに「あだ名」で挨拶している。それから私にその人の本名を教えてくれるのである。むしろ彼はかつて村の選挙管理委員会のメンバーだったから、人々の戸籍上の本名を知っているのだ。その生き生きとした顔は、さっきの室内でのそれとは大違いだ。この違いはどこから来るのだろうか。ドン・ニシヨの表情の落差に、私は考え込まざるを得なかった。

ドン・ニシヨの頭の中では、「あだ名」は知人の風貌、あるいは住んでいる家などに関連している項目として分類されているらしい。別の言葉で言えば、ドン・ニシヨが自分の目で具体的に見ることによって喚起されてくる情報なのではないか

ということだ。抽象性が低く、しかし逆に具体性・具象性に富む知なのだろう。実際に「人」を見て想起されるものなのだ。このことに関して、私は以前の連載（第12回）の中で、マヤ人の知について、「彼らの知は現代の私たちが慣れ親しんでいる西洋流の『分析的な知』ではなく『叙述的な知』、すなわち五感で捉えうるものの描写をその基礎に置いており、かつ彼らの日常生活との関わりにおいて整理・区分されているのである」と述べたが、この「あだ名」に関するドン・ニシヨの知識のあり方は、まさにこの解釈にあてはまるものである。実際、「あだ名」そのものに、「叙述的な知」が反映されているものがあるのだ。例えば、ピソット（Pizot アナグマの意）、オッチ（Och キツネの意）などの動物の名前が「あだ名」となっているのは、あるいはそう呼ばれる人の行動なり風貌がその動物に似ているからなのだろう。また、ベッチ（Bech ウズラ）という「あだ名」は、この人の家の敷地に先スペイン期の遺構があり、その壁の地下深くから「ウズラ」に似た鳴き声が聞こえるからという理由で付けられたものだという。中にはドン・ニシヨ（Nixo）のように、本人もその意味がわからない「あだ名」を持っている場合もある。

「あだ名」で呼ぶ習慣は、先スペイン期から存在していたことについては、すでに以前の連載（第10回）の中で詳細に述べたが、先スペイン期から存在した4種類の名前、すなわち、1) アフ・キン・コイ（Ah Kin Coyi）の様に職名と父方の姓また母方の姓を用いるもの、2) ナ・ブック・キメ（Na Puc Cime）の様に母を表すナ（Na）という語で始まり、母方の姓・父方の姓（Cime）の順に表されるもの、3) アフ・チャック（Ah Chac）の様に単独で、または父方の姓と組み合わせたアフ・ケン・カヌル（Ah Cen Canul）の様な幼名（paal kaba）、そして、4) アフ・ショチル・イチ（Ah Xoch'il Ich）の様に単独で、あるいはアフ・ケン・マイ（Ah Cen May）の様な父方の姓と組み合わせた文字通りの「おかしな名前、すなわちあだ名（coco kaba）」全部を、一つの大きなカテゴリーとして今「あだ名」と呼ぶことにすると書いた。だが、ここで明確にしておきたいのは、現代のマヤ村落で使われている「あ

だ名」は、史料に記録されている3) および4) から派生したものと考えられるのだが、姓をつけて使用されることは稀で、同じ「あだ名」を持つ人が2人いて、それを違えて言及しなければならない時に限るそうだ。

さて、同じ連載の中で、私は『「あだ名」で相互に呼び合っている彼らの社会の中での人間関係は極めて『緊密』なものであり、人との距離は実に近いものであったと言わざるを得ない。当然仲間意識は強いだろうし、それは『外』と『内』とを明確に区別するものにもなっていたはずだ。更には言えば、後古典期後期（1250年ごろ～16世紀半ばまで）のマヤ社会にあっても、王族と貴族間の関係もそうであったろうし、あるいは彼らと一般農民との間柄も、私たちが想像するほど懸絶したものではなかったのではないかとすら思える」と述べたが、その後の野外調査や研究の中で、これはまだ「あだ名」で呼び合う習慣を持つ社会のほんの一面しか述べていなかったことが分かった。

それは2022年5月、ドイツのボン大学付属ボン従属関係・奴隷研究センター（Bonn Center for Dependency and Slavery Studies）が主催した「捕虜、奴隷、強制労働：共通紀元前300年から共通紀元後2022年にわたる長期持続におけるマヤの非対称従属関係の検証（Captivity, Slavery and Forced Labor: Examining Maya Asymmetrical Dependencies in the Longue Durée, 300BCE-2022CE）」と題する国際シンポジウムに招かれ、その発表論文を準備し、さらに出版のための修正版を作成する作業の中で気づいたことであった。論文の中で、私はマヤ社会における奴隷の概念を明らかにし、その人数は少なく「奴隷階級」を構成するには至っていなかったこと、またその多くは社会的規範を守ることができなかった、あるいは戦いに敗北したことによって「一時的」に「どうしようもなく駄目な人間、埒外の人」という意味での奴隷という社会的レッテルを貼られ扱われていたのであり、恒久的に奴隷状態にとどまるものではなかったらしいことを論証した。そして、16世紀後半にアルファベット表記のマヤ語で書かれ、17世紀初めに編纂された『カルキニ文書』を使って奴隷の名前をリストアップしてみた。そこで面白い事実を発見した



のである。通常、王族や貴族に関して複数の名前が記録されている。例えば、ナ・バトゥン・カンチェ (Na Batun Canche) の幼名はシヤフ (Siyah) であり、ナ・チャン (Na Chan) とも呼ばれていたと『カルキニ文書』は述べている (Okoshi Harada 2009:50)。ところが、奴隷に関しては一切他の名前が記されていないのである。この事実気がついた時に、私は「奴隷」が置かれた社会的立場の意味をより深く理解することができたとともに、「あだ名」の性質を別の角度から考えることができたのである。

奴隷は「社会の埒外に置かれた人」であると述べた。マヤ社会は相互扶助 (互酬関係) をもとに成り立っている。実際、フランシスコ会修士ディオゴ・デ・ランダによれば、「インディオたちは、あらゆる作業においてお互いに助け合う良い習慣を持っていた。播種期に人手がない場合にはおよそ 20 人ずつが集まり、一緒になって播種を行い、それを終えるまでは作業をやめなかった。(中略) 狩猟も大体 50 人ずつが組になって行う。そして獲物を部落に持ち帰り、首長への貢物をとってその残りを仲良く分ける。漁猟の場合も同じである。インディオたちが人を訪問する時には、常に相手に応じた贈り物を持っていくが、訪問を受けた者も贈り物をしてこれに応える」と述べている (Landa 1938:xxiii:41)。したがって、「埒外に置かれる」ということは、この関係性の外に置かれることを意味し、社会的な保護を受けることがなくなってしまうことを意味したのである。永続的に奴隷状態になった例が少ないとすれば、それは「一時的な罰」であると言っていいだろう。

その中であって、「あだ名」などで呼ばれない、逆に言えば本名だけで呼ばれることは何を意味するのだろうか。「社会的な保護」を受けられない立場にあることから、「あだ名」は何らかの形でその「保護」と密接な関わりがあると考えなければならぬ。

この点に関して、一つのヒントがある。それは、グアテマラのマヤ系先住民キチエー族の王族が著した『ポ波尔・ウフ』と題する本に書かれている内容の解釈である。この書物は林屋永吉先生の手で流麗な日本語に訳され、中公文庫から出版されているから手軽に読めるので、ぜひ手に取ってお読みになることをお勧めする。旧約聖書に似た天

地創造譚から始まり、人類の創造などの神話的説明を経て、キチエー族がどのように王国を築いたのかという歴史的な説明が語られている。この本を通して、私たちはマヤの宇宙観だけでなく、とりわけ他のメソアメリカ地域では間接的にしか情報が得られない、冥界の具体的な様子を知ることができるのである。(写真 3)

「名前」に話を戻そう。この『ポ波尔・ウフ』の中に次のくだりがある。フンアフプーとイシュバランケーという神話的英雄 2 人が、シバルバー (冥界) へ向かい、さまざまな試練に打ち勝ったのち、かつてそこの主たちに殺された父たちの復讐をするために一計を案じ、彼らの名前を知ると、それを口に出して挨拶をした。主らは「自分たちの名が知られないようにと願っていたのであった」が、そうはならなかった (第 2 部第 8 章)。なぜ、名を知られては困るのだろうか。それは、名前を知っている者に従属すること、すなわち相手の力に屈服し、その支配のもとに置かれてしまうからなのである。シバルバーの主たちは 2 人にその名前を知られたことによって、力を失い抵抗することが出来なくなってしまった。だからフンアフプーとイシュバランケーはその後自分の名を彼らに明かして、「お前たちを皆殺しにしてやる」と脅すことができ、一方シバルバーの主たちはこの 2 人に哀れみを乞うはめになるのである (第 2 部第 14 章)。「あだ名」のもう一つの役割は、まさにここにあるのではないか。「本名」を知られないようにするためなのだ。「あだ名」は、言ってみれば服のようなもので、体を隠し守ってくれる、

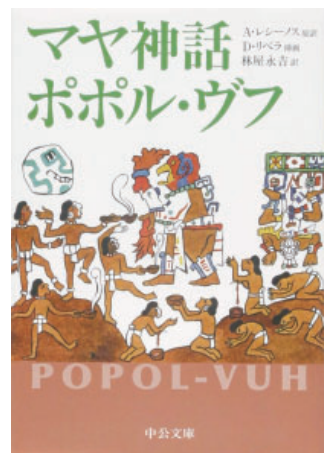


写真 3 『ポ波尔・ウフ』中公新書 (2016年)

それが剥がされて裸体になった者はあらゆる力を失う、ということなのであろう。

今年の夏（2023年）の調査で、私の友人が面白いことを語ってくれた。彼女はツィットバルチェに住んでおり、この村でも人々は通常「あだ名」で呼び合い、それぞれの本名は知らないのが普通だという。彼女も、自分の本名を小学校に行くまで知らなかったそうだ。学校で最初に出席をとる時に初めて本名で呼ばれ、それを知らなかった彼女はもちろん返事をせず、「先生、私の名前呼ばれてないんですけど」と大真面目に言ったそうだ。同級生も皆そうだったそうだから、先生は大汗をかいて皆の「本名」を教えたに違いない。彼女はこの一大ニュースを家に帰って母親に報告し、初めて自分の戸籍上の名前を確認したのだと笑いながら言う。ちなみに、彼女の「あだ名」はソナ（Soná）だそうだ。小さい頃いつもスペイン語で「ソナハ（Sonaja）」と呼ばれるからがらで遊んでいたからで、ソナとも、それから派生したソニア（Sonia）と今でも呼ばれている。

その彼女が、「なぜお互いに『あだ名』で呼び合っているのか」という質問に対して、次の様な説明をしてくれた。それは、森に住んでいる妖精（duende）が子供をさらって行き、そこで何年もかかってまじない師（brujo）に仕立て上げてしまうのを防ぐため、彼らに本名を知られなければさらわれないからだという。なるほど、やはり本名を他の人に知られると自由を奪われ、相手の言いなりになってしまうと考えられているようだ。

となれば、奴隷たちが「あだ名」で呼ばれなかった理由もわかる。彼らは社会的規範に反する何らかの行為により「埒外に」置かれたのだから、社会的庇護は全く受けることができない。「あだ名」という衣服を身に纏うことができず、「本名」だけで呼ばれるという、裸体姿でいるしかない存在だったのである。この社会的制裁はかなり「恥ずかしい」ことであり、日本的に言えば「恥」であり、よほど屈辱的なものであったろう。この時代のものではないが、古典期（紀元後250年から950年ごろ）の都市の多くで描かれた戦争捕虜、その多くは王族・貴族なのだが、皆「ふんどし」一つの裸で描かれているのは、このこととも関連しているのではないかと感じてしまう。次の写真を見ていただきたい。（写真4）



写真4 メキシコ、チアパス州ボナンパック遺跡にある建物1第2室の壁画。

([https://www.latinamericanstudies.org/bonampak/Room-2\\_1.jpg](https://www.latinamericanstudies.org/bonampak/Room-2_1.jpg))

（最終閲覧日：2023年12月22日）

これは、メキシコ・チアパス州ボナンパック遺跡にある「壁画の神殿」（建物1）の3室ある部屋の中央（第2室）の壁画の一部である。神殿は8世紀末の建築で、この壁画はボナンパックの王が近隣の都市と戦って勝利したことを描いている。中央に立つ王や両脇の貴族が、皆それぞれの身分を表す頭飾りや衣装を纏って立位で描かれているのに対し、捕虜となった敵方の王や貴族はそれよりも下の段に座っていて、身分を示すものを剥奪され、全員「ふんどし」しか身にまっていない。手から血を流している2人は爪を剥がされたのだろうか。ともあれ、社会的地位や特権を剥奪された者という彼らの立場を、この壁画は実にはっきりと視覚的に示しているのだ。この後、敗れた王や貴族の何人かは生贄として殺されるのだが、そのほかの人々は奴隷として扱われる運命にある。このボナンパックの壁画以外にも、高手小手に縄をうたれた「ふんどし」姿の捕虜を描いた石碑や石像は数多い。このような敗者の描き方は、数世紀後のマヤ社会における「奴隷」の社会的意味や扱いに連続と受け継がれているのではないかと私は考えるのである。

今年の調査は、それまでの私の理解をさらに深める結果を得ることが出来たのだから実り多いものだった。今回は書かなかったが、ツィットバルチェという町で町長の依頼で講演し、町の中を案内していただいて、いろいろな先スペイン期の遺構が家の敷地などに眠っていることがわかった。また、友人を通して、この町では道が交差する辻（角）に名前が付されているのではなく、道その

ものに独自の名前がつけられていることも知った。その命名法はヌンキニ村におけるものと同じで、「そこに大きなスモモの木があるから」など、誰もが知っている「目立つ何か」に基づいているのだそうだ。来年は、ツィットバルチェに腰を落ち着けて調査をするつもりだが、次回の連載では今年この村で学び考えたことを書いてみたい。

## 参考文献

- Landa, Diego de  
1938 *Relación de las cosas de Yucatán*. E.G. Triay e Hijos Imps., Mérida, Yucatán, México.
- Okoshi Harada, Tsubasa  
2009 *Códice de Calkiní*. Universidad Nacional Autónoma de México, México D.F.
- レシーノス、アドリアン（原訳）  
2016 『マヤ神話 ポポル・ヴフ』、林屋永吉訳、中公文庫。

(IELAK 研究員)

## 連載：ラテンアメリカから米国への人の移動を考える（11） —米国に押し寄せるさまざまな人の大移動と米墨国境のグローバル化—

牛島 万

トランプ前政権がいわゆる移民に強硬策を講じていたことから、バイデンはそれを逆手にとって公約のなかで緩和策を謳っていた。それに対する期待は大きく、大勢の移民が米墨国境へと押し寄せた。その状況は未だ変わらないが、結論から言えば、2021年1月の就任以来バイデン政権下で移民の受け入れの増大については大きな進展が見られていないのが実情である。そして今年（2024年）11月には大統領選がある。また選挙戦では移民問題を糧に双方が互いに牽制し合うことであろう。バイデンはトランプが2020年に実施し始めたタイトル42（コロナ禍の緊急事態において庇護申請を受け付けず即時メキシコへ手続きなしで追放する）を即刻取りやめ、庇護申請と移民の受け入れ開始に大きな変化が見られることが期待されていたが、結局は2023年5月までコロナ禍でのタイトル42が続けられた。バイデン政権の移民に対する対応が遅れている要因についてはさまざまな理由が考えられる。第1は、共和党の反対である。これは根本的に新たな移民法が制定できない理由となっている。第2は、コロナ禍での対応のためである。コロナ禍の影響で失業や低収入などによる家計の圧迫など、移民の経済的困窮がその理由に考えられる。無論、米国側にも外国人移民の国内への流入は経済的、社会的問題を惹

起しかねない。第3に、タイトル42の本来の目的である健康衛生面での保護のために入国が制限されるということも理にかなった考えであった。しかし問題は、2023年の上半期においてもなおタイトル42が続けられていたことである。実は、タイトル42は本来2022年12月21日をもって終えてタイトル8へ一本化される予定であった。ところが、米国最高裁がバイデン政権によるタイトル42の停止を違憲としたため、2023年5月までその廃止は延期されることになった。

そればかりではない。コロナ禍が始まるかなり前から、すでに不法移民はメキシコ出自の者が減少してきている一方、逆に、中米の3ヶ国（グアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラス）出自の増加へ移行していた（しかし、2023年の段階でメキシコ人の米国への庇護申請件数は3位である）。しかしコロナ禍より少し前に、すでに不法入国の出自国がよりグローバル化していた。とくに、ベネズエラ、キューバを筆頭にその数は半端ではなく、まるで大群の民族「大移動」であった。キューバの場合、1959年の革命から1962年の間に25万、1965年から1975年までに26万、マリエル・ポートリフト事件の1980年4月から9月までに12万5000人、1994年のバルセロ（筏）事件では3万2000人、これらを含んで1959年



以来 170 万人がキューバを離れた。しかし、2022 年 3 月からの 1 年間だけで 30 万人以上が国を脱出したことは異例である。この原因を考えるうえで、コロナ禍以前からの反政府運動の兆候に着目したいが、これにコロナ禍や経済封鎖等による困窮が重なったからではないかとみられている。加えて、革命を知らない世代が国の指導者として輩出されている今日、社会主義を固持する理由や自負はかつてと同じというわけにはいかないであろう。キューバの場合、ニカラグアがキューバ人の入国にビザを必要としなくなったために、コロンビアからパナマに抜ける過酷なダリエン地峡を通る者は極端に減ってきている。反面、最も多いのがベネズエラで 2022 年以降に急増してきている。それ以前はほとんど見られなかった。ベネズエラの場合は、2023 年 12 月現在で 700 万が国外に脱出していると言われているが、必ずしも米国への流ればかりではなく、コロンビア、ペルー、ブラジル、アルゼンチン、チリなどの南米諸国の受け入れが見られる。2023 年 9 月にはバイデンは、2023 年 7 月末までに米国に入国している 47 万 2000 人のベネズエラ人に一時保護資格 (TPS) を与えることを発表した。すでに TPS を認められている 24 万 2400 人に追加されることになる。TPS とは、6、12、18 ヶ月の滞在が認められ、一定の範囲内での労働も許可される。これとは別に人道的配慮 (parole humanitario) は米国内に保証人を立てることで月に 3 万人の合法的入国と 2 年間の滞在と労働を認めるものであるが、この対象としてキューバ、ハイチ、ニカラグアと並んでベネズエラが入っている。これにより、2023 年の上半期までにその数は 10 万 6500 人になっている。また逆に、キューバも同様だが、このような人道的配慮の対象国になっているものの、条件に合致しない場合は容赦なく強制送還されている。ベネズエラ人もこの 4 年間で 1000 人以上が強制退去の対象になったという。この場合はおそらく多くは犯罪歴があることが考えられる。

さらにこれらとは別に庇護申請のためにメキシコなどで待機させられている者たちの存在を忘れてはいけない。バイデンの TPS 枠の増大や人道的配慮の対象になっていない、あるいは申請を

待っている者に対する抜本的な対応策は講じられていない。2023 年 12 月だけ米墨国境のメキシコ側で 22 万 5000 人が待っている。この数は 2000 年以來最大である。2023 年 5 月から 9 月までの 5 ヶ月間でのべ 150 ヶ国、25 万 3000 人が本国に送還されている。つまり、米国の移民問題は米国一国のイシューではないことは明白である。つまり、中南米を含めた南北アメリカ全体の問題である。しかし、ここからさらにわれわれは思考を変えてより世界に目を向けなければならない。ダリアン地峡を越える越境者のなかには、ベネズエラ、コロンビア、エクアドルなどの中南米だけでなく、アジア (中国、インド) やハイチ、アフガニスタンなどの出自が見られる。ホンジュラスを通過する不法入国者には、セネガルやギニアなどのアフリカからの出自も見られる。さらに米墨国境ではこれらに加えてウクライナ人が 2022 年以來庇護申請を求めて待っている。ウクライナについては特別にこれまで随時入国が認められてきた。現在、共和党はウクライナへの援助の前に米墨国境の安全保障が優先されるべき課題であるとバイデン政権を批判しているが、これが物議を醸している。米国に入国を許可されてもテント暮らしの者が米墨国境の米国側にも散在しており社会問題にもなっている。さらには、2022 年 6 月以來最大の新たなキャラバンがすでにメキシコ・チアパス州のタパチュラを 2023 年 12 月 24 日のクリスマスの日に出発し、米国へ向けて 6000 人が北上を始めている。

## 参考文献

牛島万

2023 「ラテンアメリカから米国への人の移動を考える(9)——タイトル 42 の真相——」『いえらっく』、vol. 44、6-7 頁。

住田育法・牛島万

2023 『南北アメリカ研究の課題と展望—米国の普遍的価値観とマイノリティをめぐる論点』、明石書店。

その他、新聞記事等をインターネット上で参照したが、紙面の関係上、その引用元のサイトの掲示は省略する。

(IELAK 研究員)



## 第 23 回ラテンアメリカ研究講座

## 潮と風に運ばれた人々：

## ラテンアメリカ世界を巡る「グローバル経済圏」の形成と変容を考える

住田 育法

2023年12月9日、第23回ラテンアメリカ研究講座が「潮と風に運ばれた人々：ラテンアメリカ世界を巡る『グローバル経済圏』の形成と変容を考える」というテーマで開催された。今回の講座では、京都外国語大学ラテンアメリカ研究センターの研究員に加えて、大航海時代の歴史に詳しい研究者が集い、研究報告と議論が行われた。

本研究講座では、先スペイン期から19世紀に至るヒトの動きと、それがアメリカ大陸、特にラテンアメリカ世界の経済圏の構築や維持にどのように作用したのかを多様な視点から考えた。ここでの「グローバル（地球規模）」の意味は、15世紀の大航海時代をはるかに遡るホモ・サピエンス誕生に至る時間と空間の展開にまで目配りをするということである。

講座は京都外国語大学講師フェリッペ・モッタ研究員の総合司会で進められ、大越翼研究センター長のあいさつで始まった。

大越センター長は、ラテンアメリカを対象として第23回を迎えた今回の研究講座の方法論について、南北ラテンアメリカの東に展開する大西洋圏、またその西に位置する太平洋とアジアを結ぶ空間のヒトとモノの交流にまで地域を拡大させたことを強調した。そしてこの広大な空間の中で、南北アメリカ、とくにラテンアメリカ世界において、人類がどのようにグローバルな経済圏を構築し、これが現在に至っているのかについて、皆さんと共に議論したいと述べた。ヒトとモノの交流は、先スペイン期にも南北アメリカ間に存在し、この世界に、ヨーロッパからは、スペイン人やポルトガル人、さらにイギリス人、フランス人、オランダ人などが加わり、南北アメリカ、アフリカ、ヨーロッパをつなぐグローバルな経済圏が築かれたと語り、センター長は報告者にバトンを渡した。

続いて、モッタ研究員の司会で、5名の報告が行われた。



第 23 回ラテンアメリカ研究講座のポスター

センター長から報告者各位への事前のお願いは、次のような内容であった。

具体的には、先スペイン期の大陸内経済圏の構築に端を発し、16世紀以降ヨーロッパ諸国のアメリカ大陸の進出に始まる相互の政治的・経済的せめぎ合いの中で、太平洋と大西洋との関連を見据えつつ、ラテンアメリカ世界を舞台とした「グローバル（地球規模）経済圏」の有り様を分析する。ここでは、ヨーロッパ各国の役割に加え、その経済を支えた商人や職人たち、さらには商品として扱われていた奴隷を含むモノに焦点を当てたい。また、交通手段として風と潮に依存しながらの船の交易における時間的、量的側面などの面にも目を向ける。そして、19世紀以降の交通手段の発達やラテンアメリカ諸国の「独立」を背景にして、それまで機能していたグローバル経済圏が新たなナショナリズムのもとでどう変容していくのかを、カリブ海地域に焦点を当てつつ具体的に観察する。これによって、植民地時代に構築された「グローバル（地球規模）経済圏」の原型が、どのように現代のものに包摂されていくのかについての具体的プロセスを検証したい、という趣旨であった。

以下に5名の報告者の要約を報告順に紹介す

る。

最初は、南博史京都外国語大学教授による「コスタリカ太平洋側南部を中心とした古代のモノの交流—古代メソアメリカと古代アンデスをつなぐ川と海の道—」である。コスタリカでは古代メソアメリカの威信材であるヒスイ製品と古代アンデス文明の金製品が重なって発見されており、川と海は両文明を結ぶ交流の道であった。近年、コスタリカ太平洋側南部のオサ半島では考古学調査が盛んに行われている。2014年世界遺産に登録されたディキスの石球のある先コロンブス期首長制集落群もその一つである。こうした中、オサ半島南部ドゥルセ湾にそそぐティグレ川に沿って分布する遺跡の考古学調査を開始した。その目的は、この地域がコスタリカ南部太平洋側における川と海の交流の中心地の一つであった可能性を明らかにすることにある。コスタリカ国立博物館が進めているパナマからコロンビアにかけて広がっていた先住民チプチャ族が遺した遺跡・遺物の研究の紹介をあわせて、今後の研究の展望を紹介する。

続いて、合田昌史京都大学教授が、「コロンブスはポルトガルで何を学んだのか—潮と風の秘密をめぐって—」について報告した。1492～93年、コロンブスはきわめて大胆な航跡で大西洋の横断に成功した。その要因をポルトガル時代に遡って考察する。コロンブスは1476年から約9年間ポルトガルに滞在し、すでにリスボンで海図作成業を営んでいた弟バルトロメと連携して活動した。息子エルナンドの伝記によると、南へ航行し西方へ転じて航行すれば土地が見つかるコロンブスが考えるようになったのは、ポルトガルにおいてである。アジアへの西回り航海案の理論的前提は、約25%過少評価の「小さな地球観」であるが、航海の実現を担保したのは、ポルトガル時代に習得した北大西洋の海洋地理である。その学習と人脈形成をより円滑なものとしたのは、1479年のフェリパ・ペレストレーリョとの結婚である。フェリパはマデイラ諸島ポルト・サント島の世襲領主バルトロメウの娘で、ラス・カサス神父はコロンブスとフェリパの息子ディエゴから聞いた話として、コロンブスはフェリパの母イザベルから亡夫バルトロメウの「航海に関わる器具・書類・絵図」を譲渡されたと言う。また、カトリック両王のもとで実現した第1回航海の日誌や『世界の形姿』



全体討論の会場にて

の欄外注記によれば、コロンブスは西アフリカ・ギネーへの航海の経験があった。したがって、妻の一族から得られた知識ばかりか、15世紀中頃までにポルトガルで成立していたギネーからの「帰航アーチ」についても知り得たはずだ。これを応用し大きく西方へ展開したものが第1回航海の航跡である。ナウ船1隻とカラヴェラ船2隻のコロンブス隊は、パロスからカナリア諸島へ南下したあとその緯度をほぼ保ちながら西行し、帰りは北上して偏西風を利用しアソーレス諸島経由で帰還という時計回りの大四辺形を描いた。

3人目は、布留川正博同志社大学名誉教授が「大西洋奴隷貿易とラテンアメリカ—19世紀ブラジルを中心に—」について以下のように報告した。コロンブスの「新世界発見」以降、スペイン、ポルトガルをはじめとするヨーロッパ列強は、カリブ海諸島を含む南北アメリカを植民地化する。植民地開発を実行するために各地の先住民を支配し、その労働力を使役したが、16世紀における先住民人口の大規模な崩壊によってその代替的な労働力が必要になった。そのためにアフリカの各地から奴隷が輸入された。最新の研究データによると、1501～1867年の期間にアフリカ全域から連行された奴隷総数は1252万人、南北アメリカ（一部旧世界を含む）に生きて上陸した奴隷総数は1070万人と推計されている。このうち、スペイン領アメリカには114万人、英・仏・蘭のカリブ海域には合わせて378万人、ブラジルには481万人の奴隷が連行された。カリブ海域とブラジルに奴隷が集中的に導入されたことがわかる。奴隷は各地のプランテーションや採掘現場な

どで不可欠の労働力であった。奴隷がアフリカ各地からどのように連行されたのか、また、ラテンアメリカの各地でどのような役割を果たしたのか、を明らかにした。

次に牛島万京都外国語大学准教授が、「『海の道』から読み解く 19 世紀米墨戦争前夜のメキシコ」について報告した。メキシコの 19 世紀史は主として「陸」の歴史であり、「海」の歴史はほとんど出てこない。その理由は、第 1 に、19 世紀の一大事件である米墨戦争をみてもわかるように、19 世紀の軍事史は陸軍の歴史と言えるからである。当時メキシコ戦艦はあったが、海軍は戦力として弱体であった。第 2 に、メキシコは独立後まもなく外国の脅威にさらされ、四半世紀後には対米戦争を経験することになるが、このような外国勢力を払拭するため国の安全保障に余念がなかった。このようなメキシコ市から見た従来の史観を補完すべく、希少な地方史および外国の史料を報告者は用いた。これにより、すでに 19 世紀前半の米墨戦争前夜において、主要港の外国戦艦による封鎖、密輸を主とした外国との通商や外国人移民の居住等によって、メキシコはいみじくも当時の国際通商を成立させる重要な役割の一端を担がされていたことがわかると、この地域からより空間を広げて牛島准教授は解説した。つまり同時代のカリブ海域史やメキシコに漂流した日本人の善助など 19 世紀の徳川時代における太平洋を挟んだ交流にも触れ、太平洋という広大な「海」の歴史にも目を向けた。

最後に住田育法京都外国語大学名誉教授は、「南米大陸北部の空間のナショナリズム—大西洋とカリブ海をつないだアマゾン川の航行をめぐる一」と題して報告した。ポルトガルの 17 世紀は隣国スペインからの独立を果たしたナショナリズムの時代であり、これに賛同した強力な同盟国が、19 世紀にかけて支援を行ったイギリスであった。富の源であった南米のブラジルは 1822 年に独立

し、本国ポルトガル同様に対英従属を受け継ぐものの、その独立を世界で最初に承認したのはイギリスではなく米国であった。20 世紀に向けてブラジルは親米の姿勢を強めていく。他方、フランスは 16・17 世紀、オランダは 17 世紀にいずれも自らの植民地をブラジル領土内に獲得したが、戦いに敗れ撤退する。ポルトガルの隣国スペインは、18 世紀の 1750 年マドリッド条約で、1494 年にポルトガルとの間で調印されたトルデシーリャス条約の境界線を越えてポルトガル人が大陸西方への開拓を進めたため、アマゾン川流域を含む広大なスペイン領を失う。やがて旧共和制下の 19 世紀末に、ブラジルは武力による戦争ではなく外交交渉によって、周辺諸国との領土問題をブラジルに有利な内容で解決した。カリブ海に面する南米大陸北部のキアナ高地とアマゾン川流域地域において、スペインをはじめイギリスやオランダ、フランスと地理的空間の支配をめぐる、ポルトガル語圏ブラジルは歴史を紡いできた。大航海時代に遡るグローバルなポルトガル史において領土の占有を競ってきた南米ブラジルの空間のナショナリズムの展開を考察した。

以上 5 名の報告は、合田教授、布留川名誉教授、牛島准教授の 3 名が海の道、南教授と住田名誉教授が川の道を扱った。研究報告を受けて、登壇者と複数のネットからの質問を交えての自由な討論の場が作られ、活発な質疑と応答が進められた。黒人奴隷のみではなく、新大陸の先住民奴隷の実情も議論された。最後に、今回の報告者の資料の多くが古文書などの一次資料であることが重要であり、海外ではあたりまえであった研究方法が身近なものとなり、今後への期待が高まったと大越研究センター長がまとめのコメントを述べた。モッタ研究員の閉会の言葉で講座は盛会のうちに終了した。

(本学名誉教授／IELAK 客員研究員)



金、銀、銅。チリは、ペルーやメキシコを抜いて、銅の産出国として世界トップの座にある。銅は金属なのに錆びないし、摩耗しにくい。伝導性は高いが、磁性を発しない。加工しやすく、表面が美しいので、鍋からロケットまで、幅広い需要がある。チリでは、1852年、首都サンティアゴの北西に位置するタマヤ銅山の開発により、産業革命が進むイギリスへの輸出を伸ばし、1870年代には世界トップの産出量を誇った。しかし、価格が下落し、繁栄は続かなかった。その後、再び価格が戻ると、アメリカン・ハイウエイを延ばしたアメリカが進出。かつて銅の抽出は1トンあたり30～60%であったが、20世紀初頭には枯渇し、1～2%までに落ち込んでいた。精錬技術の革新が必須であった。チリはアメリカの技術に頼って鉱山開発を進めざるをえず、チリの鉱業はアメリカ資本に牛耳られることになった。

1929年、世界シェアの40%をアメリカ合衆国の8つの銅山とチリの3つの銅山でまかなっていた。そして、1971年、アジェンデ政権が鉱業を国有化。その後の世界を席卷した日本製品を支えたのは、チリの銅であったと言っていいだろう。1980年代半ばから今日までに、チリの銅の生産量は4倍にもなっていて、現在でも日本は約4割の銅をチリから輸入している。ただ、最近、チリからの輸入品といえどワインのほうが知られるようになった。(立岩礼子/IELAK)



## いえらっく・めも



本号の『いえらっく』は、京都外国語大学前理事長、森田嘉一先生への追悼記事3本を巻頭に掲載しています。森田先生は1976年から2021年まで、本大学の理事長を務め、去年お亡くなりになりました。私はその訃報を耳にした時に、「止めることのできない時の流れ」を感じました。

京都外国語大学ラテンアメリカ研究センター（当時は京都外国語大学メキシコ研究センター）の設立は、森田先生が理事長になられて4年後でした。それ以来、ラテンアメリカも、日本も、そして世界も著しく変化しました。

現在のラテンアメリカでは武力による紛争がなくなり、民主主義が広がり、人権の尊重に取り組んでいます。もっとも、ベネズエラやニカラグアには当てはまりませんが。また、人間開発指標も向上しています。これは、人々がどの程度豊かな生活ができ、健康な生活を送り、十分な教育を受けているかを示す指標です。しかし、大きな社会的不平等、貧困、政治的腐敗、そして多発する犯罪は今も存在しています。

現在の日本は、相対的な富が減少しており、1人当たりのGDPはOECD諸国の平均を下回っています。また、少子化、高齢化、そして労働力不足という深刻な問題にも悩まされています。これらの問題に対処するためには、外国人移民に対するより一層の門戸開放が必要となるでしょう。そのはじめの一歩として、1990年代以来、ラテンアメリカの日系人、特にブラジルとペルー出身の多くの移民が日本に到着し、日本人とラテンアメリカ人が共存する新しい機会が生まれています。

世界的には、インターネットの普及や海外旅行により、遠く離れた社会同士の交流が容易になりました。一方で、気候変動が人類にとっての脅威となり、それに対する対策として非化石エネルギー社会への移行が始まっています。さらに、人工知能の発展により、近い将来の働き方、学び方、知識のあり方について、これまで私たちが経験したことのない問題に直面し、それを解決していかなければならないでしょう。

このような状況の中で、大学や研究機関は、科学的な研究と相互尊重に基づいた対話、議論、アイデアの自由な表現の場であり続けるべきです。京都外国語大学ラテンアメリカ研究センターは、ラテンアメリカの社会や文化の分野において、この役割を果たし続けていきます。

(LV)

## のていしあす NOTICIAS

## &lt;第23回ラテンアメリカ研究講座 開催&gt;

2023年12月9日(土)、ラテンアメリカ研究講座「潮と風に運ばれた人々:ラテンアメリカ世界を巡る『グローバル経済圏』の形成と変容を考える」を開催した。概要を本号(13-15頁)に掲載。報告者は以下のとおり。

南 博史(京都外国語大学教授)  
合田 昌史(京都大学教授)  
布留川 正博(同志社大学名誉教授)  
牛島 万(京都外国語大学准教授)  
住田 育法(京都外国語大学名誉教授)

## &lt;IELAK 研究会開催&gt;

研究所員間の学問的な交流、意見交換のためのIELAK研究会を開催した。

第23回 2023年7月13日(木)  
フェリッパ・モッタ(京都外国語大学講師/IELAK 研究員)  
「日系ブラジル移民の住居とその表象—写真、文学、展示から」

## &lt;IELAK 研究講演会オンライン開催&gt;

ラテンアメリカに関するテーマで研究講演会を開催した。  
2023年9月28日(木)  
「無限の魂:メキシコ南部マヤ族における『人』に関する存在論」  
講演者:ペドロ・ピタルチ  
(マドリッド・コンプルテンセ大学教授)  
講演内容:メキシコ南部チアパス州の先住民ツェルタル族の「人」をめぐる概念について。

2024年3月1日発行(年2回)  
発行 京都外国語大学ラテンアメリカ研究センター  
〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6  
TEL: 075-925-6853  
E-mail: ielak@kufs.ac.jp